Scramble Shot

concert

ポリーニのベートーヴェン後期3大ソナタ

9月27日、ミュンヘンのヘルクレスザールで、ベートーヴェン生誕250周年に向け、彼の後期3大ソナタを弾くマウリツィオ・ポリーニの非公開コンサートが行われた。

この模様は来年初春Artテレビで放映され、そのあとはドイツグラモフォンからDVDとして売り出される予定だ。ショパン国際ピアノコンクールで優勝した18歳のポリーニは充電期を経たあとに、ドイツグラモフォンと契約し、この3曲のCDを同ホールでも録音しているため、聴き比べると興味深いだろう。「ベートーヴェンには軽すぎる」など、本場ドイツでも異論をとなえるむきもあったポリーニの演奏が、晩年を迎えて円熟し、ベートーヴェンの晩年の感情と呼応するように感じられる。

ポリーニの指は、ドラマティックな楽想でも硬くならない。ドイツ的パワフルさはないが、煌めく音は格別だ。「ピアノ・ソナタ第30番」はきらめく音で始まり、温かく懐かしい楽想を存分に歌ったあと、紅葉を照らす秋の日差しのように温かく輝いた。続けて「同第31番」は20日前にルツェルンで聴いたときより若さにあふれ、運命の和音から湧き出るフーガが生への希求をより強く感じさせた。 後半は、登場した勢いで弾き始めた「第32番」でも十分にパワーを感じさせた。天に昇る第2楽章中に、何かのアラームが鳴り緊張感が削がれたが、上を向いて集中感を保ったあとは、死を経て昇天するような、煌めきのトリルのなかに現れる旋律が美しかった。

終演後は長蛇の列を作ったファンに、疲労を圧してサインを贈っていた。　（中 東生）

ミュンヘンで後期3大ソナタを弾いたポリーニ。筆者撮影